

吉野右京についての覚書

——妙心寺衡梅院雪江禪師像の作者——

長谷洋一

近世彫刻史にあつてひととき光彩を放つ作品として禪宗系僧侶肖像彫刻、いわゆる頂相彫刻を掲げることができる。正面からの対看礼拝する必要性から生けるがごとく制作された頂相彫刻は写実性に富み、時には鎌倉時代の肖像彫刻を再現したかのような作品も生み出している。頂相彫刻は制作者の技量がいかなく発揮された作品群といえよう。妙心寺を始め大方の禪刹塔頭では、それまで法要の際に開山祖師の画像を懸架していたが、寛永年間以降に画像を彫像に置換する傾向が生まれ、それに伴い方丈仏間は拡張され、時には障壁画も改められるなどの大改造を受けており、江戸時代初期における塔頭の改造は、彫像安置の事情に拠るところも大きいのである。

頂相彫刻の制作には、七条仏師や傍流仏師が担当したが、その他の京都仏師も多数手がけている。なかでも「吉野右京」あるいは「藤原種久」「藤原種次」と称した仏師右京は、相国寺や竜安寺などの禪刹に優れた頂相彫刻を多数制作し、加えて肖像彫刻の制作にあつてもその技量を発揮している。そこで小稿では、妙心寺衡梅院に所蔵される右京作の雪江禪師像を契機として右京の活動実績を追いつながら、右京に関する若干の検討を行うことにしたい。

妙心寺衡梅院 雪江禪師像

妙心寺衡梅院には、妙心寺中興の祖とされた雪江宗深（一四〇八―一六）の肖像彫刻が安置されている。像高七七・八センチを計り、ヒノキ材の寄木造、割首、玉眼、彩色の像で、頭部は頬のたるみが強調された個性豊かな造形で、穏やかな表情ながらも口元を固く結ぶなど、禪師晩年の気迫を感じさせる。体部はやや小振りな造形ながら、重い袖を左右に振り分け、膝前に大きく衣の褶襞を表しており、鎌倉時代肖像彫刻を彷彿とさせる作品である。小振りな体軀に大きく衣を纏う表現は、同院に所蔵される文明十六年（一四八四）の雪江宗深自賛を有する雪江禪師画像と共通しており、本像の制作にあつて画像との関連性がうかがえる。

頭部内及び胎内には以下の墨書銘が認められる。

〔頭部内前面〕□寺／寛文拾貳辛亥／〔玉眼押木〕／十月吉日

〔後頭部内〕正法山妙心禪寺

〔首柄内前面〕洛陽大宮上之／大佛師右京作／一条室町福長町居住

〔体部内前面〕寛文拾貳年／洛陽大宮方上之大佛師右京作／九月吉日

／上京一条上之福長町／居住

〔体部内背面〕寛文拾貳年／洛陽大宮方上之大佛師右京作／子ノ／九月吉日／上京一条室町居住

銘記から雪江禪師像は、寛文十二年（一六七二）に京都・上京一条室町福長町に住む大宮方上之仏師右京によって制作されたことがわかり、また体部に九月、頭部に十月と記されていることから、制作途中で彫刻用材を仮組みし割首を行って頭部材と体部材を離した後、体部を先行して制作し、その後頂相彫刻の命ともいふべき面部の造形を終了したこと

が推測できる。対看写照を重んじる頂相彫刻にあつて、面部の造形により多くの時間を費やしたと想像される。

『衡梅院歴代略記』には「享堂を構え、大仏師左京^マ作る彫刻を堂之正中に安ず」と記されており、享堂（方丈）の改造と肖像彫刻の制作安置が一連の事業であつたとみられ、妙心寺衡梅院におい手も方丈特に室中の改造が開山頂相の彫刻化に起因していることが確認できる。

さて、これまで知られる右京の事績は次の通りである。^①

- 承応元年（五三） 京都・相国寺法堂夢窓疎石像（吉野右京藤原種久）
- 明暦元年（五五） 京都・龍安寺昭堂特芳禅傑像（吉野右京）
- 同二年 京都・大徳寺養徳院実伝宗真像（藤原種久）
- 同四年（五八） 京都・龍安寺昭堂細川勝元像（右京種久）
- 寛文五年（六五） 京都・醍醐寺三寶院弥勒堂聖宝像（吉野右京種次）
- 同六年 京都・天龍寺塔頭弘源寺玉岫英種像（藤原種久）
- 同七年 京都・醍醐寺三寶院弥勒堂空海像（吉野右京種次）
- 京都・醍醐寺地藏堂空海像（吉野右京種久）
- 同一年（七〇） 沖繩・旧円覚寺仏殿釈迦三尊像（吉野右京）
- 同十二年（七二） 京都・妙心寺衡梅院 雪江禅師像
- 同十三年 香川・法然寺涅槃堂 三世仏像（吉野右京藤原種次）
- 延宝元年（七三） 京都・醍醐寺祖师堂聖宝像（吉野右京藤原種久）
- 京都・醍醐寺祖师堂空海像（吉野右京藤原種久）

このほか、富山・高岡市瑞龍寺山門羅漢像も吉野右京の作という。^②

二〇年間の事績ながら、右京は吉野右京あるいは藤原種次、種久とも称し、相国寺や大徳寺など禅刹の禅宗僧侶彫刻を専ら手がけ、寛文五年

以降に醍醐寺、円覚寺、法然寺へと制作の場を拡大していったことが確認できる。なお種久、種次の異同については後述したい。衡梅院雪江禅師像は、右京が禅刹以外の制作の場を拡大した時期にあたり、円熟した時期の作品であることがうかがわれる。

醍醐寺 聖宝・空海像

醍醐寺に残る五軀の聖宝・空海像に関しては既に調査成果があり、これに拠りながらみていくことにする。^③

三寶院弥勒堂の聖宝像・空海像には、右京の自筆と思われる胎内墨書銘と尊像奉行成身院空朝による像底朱漆銘があり、詳細な造像経緯を知ることができる。聖宝像は、胎内に寛文五年五月吉日の年号と「洛陽大宮方上之大仏師吉野右京種次作／上京一条室町二〇住」の銘記があり、また像底には、寛文五六月二十八日の年号と「尊氏之大仏師印吉法印末孫大宮方之大仏師右京種久」による制作で座主権僧正高賢によって開眼供養が行われたことを記し、さらに右京が上醍醐御影堂（開山堂）に参籠し、弘長元年（一二六一）の理源大師坐像を模刻した像が、本像である旨を記している。空海像も寛文七年と聖宝像と年号を違えるが、ほぼ同内容で胎内に寛文七年三月二十一日、像底に同年極月二十六日の年号を記し、こちらは東寺御影堂に参籠し天福元年（一二六一）の康勝作空海像を模刻したことが記されている。東寺御影堂像の模刻像はもう一体制作され、現地藏堂空海像に該当することが銘記によって判明する。なお右京は延宝元年（一六七三）にも祖师堂聖宝・空海像を制作している。

聖宝・空海像の制作に際し上醍醐開山堂像・東寺御影堂像の模刻を行った意図は不明であるが、各像の原像に忠実であろうとした意図が看取でき、右京は一对の祖師像として均整のとれた造像を目指したと思われる。加えて写実性に富んだ長野・長雲寺愛染明王坐像（寛文十三年・久七作）がもと醍醐寺行樹院本尊像として制作され、高賢が開眼供養を行っている（像底銘）ことから、この時期の造像における明快な造形性は、寛文年間での醍醐寺側の求める姿勢であったとみられる。模刻像は共に原像をよく写しながら近世彫刻特有の明るい写実的な表現へと転化されており、模刻を通じて古像を良質な近世彫刻へと再生産できた右京の技量の高さをみることができる。

さて、醍醐寺像では、右京は「尊氏之大仏師印吉法印末孫大官方之大仏師右京種久」と肩書し、院派仏師の末裔であることを標榜している。また自筆胎内銘では「吉野右京種次」、成身院空朝による像底銘では「右京種久」と記され、同一像であるにも関わらず両者で作者名が異なっている。種久・種次は親子二代にわたる仏師であるとの推測もできるが、現在までそれを明らかにする材料はなく両者の関係は不明である。

「尊氏之大仏師印吉法印末孫」の肩書は、醍醐寺像以外にはみえず、その根拠や使用事情についても不明である。しかしながら「尊氏之大仏師印吉法印末孫」の肩書は、中世院派仏師の作品が残る禅刹の造像で特に有利に働くであろう肩書と思われ、真言宗の醍醐寺で使用されたことは不審が残る。中世院派仏師の在銘作品をみる限り、最も新しい作品は文亀三年（一五〇三）院徳制作の福岡・坊の薬師堂薬師如来像であり、しかも院徳の子息与次郎は以後「博多仏師」として活躍することも指摘

されており、近世京都では、すでに院派仏師系譜の断絶を思わせる。当該の肩書「大官方上之仏師」を強調する修飾であったとも思われる。

以上、右京は、それまでの禅刹に加えて真言宗寺院である醍醐寺での空海、聖宝像の制作は、右京が禅宗僧侶彫刻の技術を真言宗祖師像へ展開した事例と考えられる。

旧円覚寺釈迦三尊像

右京は、肖像彫刻ばかりでなく禅宗の本尊類の制作にも携わっていた。沖繩・円覚寺は、妙心寺末寺に属し、琉球国王尚氏の菩提寺として隆盛を誇った。昭和二〇年の沖繩戦によって円覚寺は破壊されたが、幸いにも終戦直後に仏像片などが採集されて沖繩県立博物館に保管されている。仏殿安置の釈迦三尊像も頭部、肩材を失うなど損傷は著しいものの、体部以下は良好な状態で、また文殊菩薩像の頭部も残ることから三尊像の当初の作風をうかがうことができる。^⑤

三尊像は、共に全体に均整のとれた、ゆったりとした量感をもった造形でそこに大ぶりで賑やかな衣文を彫り出している。的確な構成の把握と安定感にとんだ作品で、高い水準を示す。三尊とも体部前後面にはほぼ同内容の墨書銘が認められる。いま、胎内前面材墨書銘を掲げる。

（胎内前面材墨書銘）「寛文拾年／洛陽大官方上之／大佛師右京作／戌／十一月吉日／上京一條室町二／居住」

文殊・普賢菩薩像

（胎内前面材墨書銘）「寛文十年／十一月吉日／洛陽大官方上之／大佛

師吉野右京作」

銘記から円覚寺本尊釈迦三尊像は、寛文十年に「洛陽大宮方上之大仏師右京」が制作し、琉球まで運ばれたことが確認できる。『琉球国由来記』『諸寺旧記』によれば、十七世紀以降の円覚寺住持はしばしば京都・妙心寺出身者で占められていたことが記され、その機縁によって右京作の釈迦三尊像が琉球へ運ばれたと推測される。右京は本山禅刹での造像のみならず、末寺の造像にもその活動範囲を広げたのである。

以上、妙心寺衡梅院雪江禅師像を初めとする吉野右京の作例についていくつかみてきた。

纏めると、吉野右京は、「洛陽大宮方上之大仏師」「尊氏之大仏師印吉法印末孫大宮方之大仏師」の肩書を持ち、京都・上京一条室町福長町に居住する仏師であった。別名である藤原種久と藤原種次の異同については明らかに出来なかったが、禅刹の禅宗僧侶彫刻を専ら手がけ、その後醍醐寺へも進出し、その技量を模刻という形で古像を良質な近世彫刻へと変換させ、加えて末寺などへと制作の場を拡大していったことが確認できた。右京の造像活動の拡大は、伝統に依拠する七条仏師とは異なる動きであり、近世京都仏師のあり方として注目したい。

「洛陽大宮方上之大仏師」の系譜

吉野右京が一貫して使用した肩書は「洛陽大宮方上之大仏師」であった。次に「洛陽大宮方上之大仏師」の肩書をもつ仏師についてみてみる。「洛陽大宮方上之大仏師」で想起される仏師としては、造仏僧として著名な宝山湛海と共作した法橋院達があげられる。院達を含む事績を次

に掲げる。

延宝 五年（	七七）	大阪・光明院釈迦如来坐像
八年（	八〇）	埼玉・密蔵院十二神将（丑神将）像
天和 元年（	八二）	奈良・宝山寺銅造弥勒菩薩坐像
貞享 二年（	八五）	大阪・松林寺不動三尊像
元禄 三年（	九〇）	京都・真如寺高德院像（院蓮）
元禄 五年（	九二）	滋賀・西教寺阿弥陀如来像修復 ^⑦

（定朝廿八代大宮方正統大仏師右京）

このほか法橋院達の作品としては、宝山寺関連のものとして、無銘記ながら常念観音堂十一面観音立像は『大聖無動寺仏像并常住物記』（貞享元年）では「令院達彫刻」としており、また同書掲載の常楽庵不動明王像も院達の作としている。さらに京都・法泉寺十一面観音像光背柄には「大宮方上之大仏師法橋院朝」の墨書銘がある。^⑧

埼玉・密蔵院十二神将像は、延宝七年から貞享元年（一六八四）にかけて造立され、しかも十二神将の各像が近世京都仏師によって制作された群像である。院達はこのうち丑神将像の制作に携わっている。左足柄に「洛陽大宮方上之／大仏師右京入道／法橋院達作／上京室町福長町／居住／延宝八年／申三月吉日」の墨書銘が認められることから院達も「右京入道」を名乗り、しかも吉野右京と同じ上京室町福長町に居住していることが判明する。このことから貞享二年『京羽二重』掲載の「室町一條上ル町 大仏師右京」は院達を示すものと思われる。

さて湛海との関係を示す院達の作品は、延宝八年の般若窟銅造弥勒菩

薩坐像と大阪・河内長野市松林寺不動明王・二童子像をあげることができ。前者光背には「大宮方大仏師法橋院達」の刻銘があり、湛海が初めて生駒山に登り、般若窟で護摩供を修した本尊である。後者は光背裏に「太宮方末孫法橋院達者余旧友令受八戒中尊予共彫刻二童子達全作也」と刻まれ、いずれも湛海と法橋院達との深い関係を明らかにするものである。特に後者にあつては、院達と湛海は旧友であつたこと、不動明王像は八戒を受けて湛海・院達との合作により、また二童子は院達が全て制作したと記されている。銘記には「生年六十四」とあることから院達の出生は元和八年（一六二二）と判明する。ちなみに院達の最も早い作例である光明院釈迦如来坐像は五十五歳時の制作である。

なお、京都・真如寺高德院像には「洛陽大宮方之正統上大仏師右京法橋院達」の銘記があるとされるが「院達」の誤りであろうか。滋賀・西教寺阿弥陀如来像では「定朝廿八代大宮方正統大仏師右京」としている。なお享保九年（一七二四）制作の山口・阿弥陀寺不動明王坐像は「洛陽上之大仏師法橋院達胤」と称する長島外記の制作によるもので、既にこの時期に院達は没していたと思われる。

藤原種久、種次と法橋院達

以上、吉野右京の事績と院達の事績をみてきた。

いま、確認できる吉野右京の最初の作品は、承応元年京都・相国寺法堂夢窓疎石像の制作で、この時、院達は三十歳を数える。院達が吉野右京の後継とみるならば、両者の年齢差はあまりないように思える。しかも種久、種次が親子関係を示すなら、その年齢差はより近接しよう。と

もに「洛陽大宮方上之大仏師」「右京」と称し、「上京一条上之福長町」に居住する点や、院達が元和八年（一六二二）の出生であり、五十五歳（延宝五年）までその作例が知られない点、また藤原種次、種久の作例が承応元年（五三）から延宝元年（七三）の二〇年間であることを勘案すれば、吉野右京の事績の後に院達の事績が繋がることもそう不自然ではないように思われる。近世仏師の動向についてはまだ不明な点が多いが、右京が禅刹、真言宗へと造像活動を拡大したことを考えると、あながち荒唐無稽な推測ではないように思える。時間的余裕のないまま稿を起こしたため、不明な点を多く残す結果となったが、今後の検討に多くを委ねたい。

註

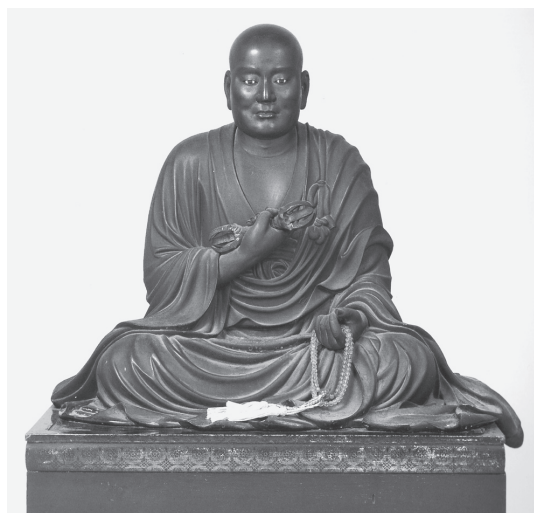
- ① 京都府文化財保護基金編『京都の肖像彫刻』（一九七八年）に加筆。
- ② 奥健夫氏のご教示による。
- ③ 副島弘道「醍醐寺彫刻所在確認調査について」『跡見学園女子大学美術・美術史学科報』二十二号（一九九四年）。西川新次・有賀祥隆監修『祈りと美の伝承 醍醐寺展』（特別展図録）（一九九八年）。
- ④ 八尋和泉「中世博多仏師の存在とその作品」（九州歴史資料館研究論集）二 昭和五十一年三月）。
- ⑤ 『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会（二〇〇〇年）。
- ⑥ 『琉球国由来記』（伊波普猷他篇『琉球史料叢書』名取書店 一九四〇年）。

- ⑦ 岩田茂樹「西教寺・逆手来迎印阿弥陀如来像と像内納入五輪塔柱」『仏教芸術』二二一 一九九七年。
- ⑧ 伊東史朗「京田辺・法泉寺十一面観音立像と仏師院朝」『仏教芸術』二四二 一九九九年。
- ⑨ 『上尾市史』第九卷別編2 金石・文化財 上尾市教育委員会 一九九九年。
- ⑩ 註1
- ⑪ 『防府市文化財調査年報』V 防府市教育委員会 一九八二年。

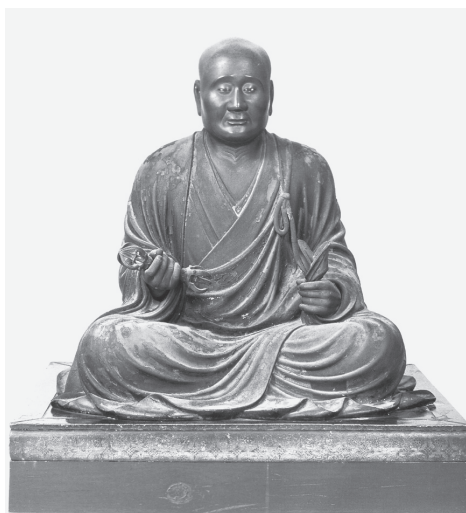
なお図版の掲載にあたっては各所蔵者・各機関より多大なご高配を賜りました。



妙心寺衡梅院 雪江禪師像



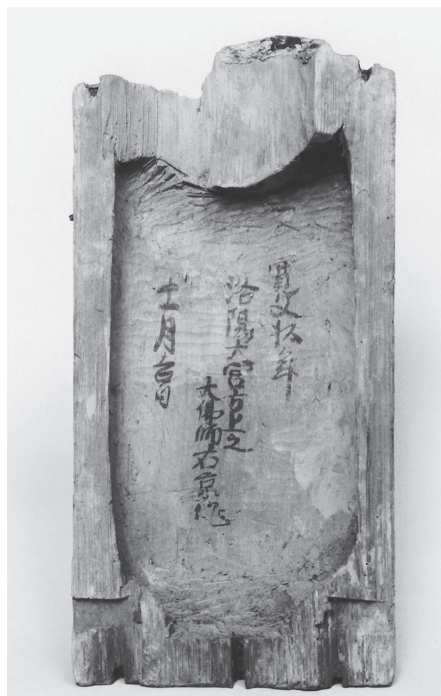
醍醐寺三宝院 空海像



醍醐寺三宝院 聖宝像



円覚寺 釈迦如来像 同胎内銘



円覚寺 普賢菩薩像 同胎内銘





円覚寺仏殿 文殊菩薩像



法然寺 釈迦如来像



光明院 釈迦如来像